

松山鏡

季は	地は	姫	ワキ
雜	越後	その娘	父
		ツレ	
		シテ	
		俱生神	

「是は越後の国松の山家に住居する者にて候。さて
も某久しく添ひ馴れし妻におくれ。昨日今日とは
存じ候へども。はや三年になりて候。又忘形見に
姫を一人持ちて候ふが。あまりに母が事を歎き候
ふ程に。対の屋を作り傍に置きて候。又今日は彼
が母の命日にて候ふ程に。持仏堂に立ち出で。焼
香せばやと思ひ候。

姫サシ

「雲となり雨となり。阳台の時とゞめがたく。花と

散り雪と消え。金谷の春ゆくへもなし。月日の道
に閑守なれば。母御に離れて今年ははや。既に
三年の其日なり。

ワキ詞

「あら無慙や。何事やらん姫が独言を申し候。いか
に姫が有るか。父が来りたるぞ。持仏堂をあけ候
へ。あら不思議や。何やらん物を立ち隠すやうに
候。如何に姫。さても汝が母におくれし時。元
結切り遁世せばやと存じ候ひつれども。一族ども

の諫めにより。今まで浮世の住居たり。汝男子
ならば父と一所に有るべけれども。女子なれば対
の屋を作り置くなり。それに父が来りて姫よと呼
ばゝ。さも嬉しげにて立ち迎ふべきにさはなくし
て。何やらん物を立ち隠すけしきの見えて候。さ
ては人の申すも誠にて候ひけるぞや。實に汝は今
の母を木像に作り。明暮呪咀するといふは誠か。
何とて左様にあさましき心をば持ちて有るぞ。母
を恋しく思はゞ。経念佛し弔ひてこそ。死したる
母も成仏し。おことも同じ蓮の縁となるべきにさ
はなくして。さやうに恐ろしき事をたくまば。正
しく浮ぶべき母も奈落に沈み。おことも同じ罪に
沈むべき事のあさましさよ。何とて物をば申さぬ
ぞ。

「さやうに御叱り候はゞ。かくさず申し候ふべし。
いたはしや母御前。今を限りの御時。此鏡を和御

前に取らするなり。母が姿を残す形見なり。恋
しき時は見るべしと。おほせ候ひし程に。ある時
此鏡を見れば。母の面立うつりしより。猶若やぎ
て見え給へば。

地
「さてはなからん跡までも。く。添ひ添はれんと
面影を。残させ給ひける。母御の慈悲ぞ有難き。
不審に思し召されば。見せ参らせん鏡山。立ち寄
り給へ父御前。く。

ワキ詞
「是は不思議なる事を申す物かな。空しくなりし母
の何しに鏡にうつりて見え候ふべき。但し屹度思
ひ出だしたる事の候。漢の武帝の后李夫人なくな
らせ給ひて後。帝后の御別れを悲しみ給ひ。御姿
を甘泉殿の壁に写し。明暮観覽有りしかども。も
とより絵に書ける形なれば。物いはず笑はず。な
かく愁ひぞ増さると悲しみ給ふ。ある時仙人の
告げていはく。まこと后の御姿を。観覽有りたく

思し召さば。月の夜の隈なからんに。反魂香を焚き給へと有りしかば。教へにまかせて月の夜の隈なきに。反魂香を焚き給へば。煙の内に后的御姿まみえ給ひしためしもあり。又我朝の聖武皇帝の后。光明皇后なくならせ給ひて後。是も后的御別れを悲しみ給ひ。梵天に祈誓し給へば。閻王憐れみ給ひ。玉の輿に乗せ奉り。二たび娑婆に送り給ひしためしもあり。さりながらそれは上代の事。

是は末世の今の世に。さやうの事の有るべきとは存じ候はねども。かれが母も姫に名残を深く惜しみ候ひし程に。もし又さやうの事もや候ふらん。立ち寄りて鏡を見ばやと存じ候。や。さればこそ筋なき事を申し候。やあ如何に姫。此鏡に母が影のうつる事はなきぞとよ。何とて筋なき事をば申すぞ。

姫
「恨めしやあれ程母のましますを。思ひ隔てゝ山鳥

の。おろかに見させ給ふかと。鏡の前に泣き居たり。實にや別れての。涙もいまだ干ぬ袖に。異妻を重ね給ひぬれば。其恨みにや恋衣の。見えじとおぼしめさるらめ。よし父にこそ疎くとも。

地

「我には見えよ垂乳根の。親の飼ふ蚕の眉墨の。いと細し誰をかも。恋ひ瘦せ顔ぞ見ても泣く。涙がすみの悲しやな。底より曇り増鏡。あれこそ母よ御覧ぜよと。我影に指をさす。實にあはれなりさ

ればこそ。幼き身の心なれ。く。

ワキ詞

「言語道断の事。我影の鏡に移るを見て。母が影にて有る由を申し候ふは如何に。總じて此松の山家と申すは。無仏世界の所にて。女なれどもはごねをつけず。色を飾る事もなけれどもはごねをつげず。申す物をも知らず候ひしを。某一年都に上りし時。鏡を一面買ひとりて彼が母に取らせて候へば。世になき事に悦び候ひしが。今はの時姫を近づけ。我

を恋しく思はん時は。此鏡を見よと申し、程に。

我影の移るを見て母と思ひ歎く事の不便さは候。いやく所詮鏡の謂を語つて歎きをとゞめばやと思ひ候。やあ如何に姫。総じて鏡といふ物には。何にてもあれ向ふ物の影の移るぞとよ。是々見候へ。父が立ちよれば父が影。扇を移せば扇の影。こゝを以て思ひ知れ。

姫「実にく父のおほせの如く。今こそかくとも三吉

野の。

ワキ「岸の山吹風吹けば。

姫「底なる影も散れば散り。

ワキ「靡けば靡く歎冬の。

姫「影をあやまつ。

ワキ「はかなさよ。

地「子ながらも。是ほど母に似けるよと。わが影ながらなつかしや。

ワキ
「父は涙にかきくれてや。

地
「我こそは曇らすれ。 面目なの鏡や。

母
「子は親に。 似るなる物と思はれて。 恋しき時は鏡
をぞ見る。

地クリ
「往時渺茫としてすべて夢に似たり。 旧友零落して
なれば泉に帰す。

母サシ
「之を水といはんとすれば。

地
「即ち漢女が粉を添ふる鏡清瑩たり。

母
「花といはんとすれば蜀人文を洗ふ錦。
地
「我とても。 婆婆の故郷に立ち帰らば。 錦の袴君が
為め。

母
「昔を語り申すべし。

地
「夢おどろかし給ふなよ。

クセ
「唐に陳氏とて。 賢女の聞え有りけるが。 世のなら
ひ思はずも。 夫遠行の子細あり。 是や限りと思ひ
けん。 形見の鏡割りて猶。 光りぞ残る三日月の。

宵に待ち明けて恨み。文も絶え主も来ず。憂き年
月を故郷の。軒端の荻の秋更けて。風の便りの伝
聞けば。夫は其国の主となり。あらぬ妹背の川波
の。立ち帰るべきやうもなし。さては逢ふ事も形
見の鏡我ひとり。涙ながらに影見れば。半月の山
の端に。打ち傾いて泣くならで。せんかたもなき
折節に。

母 「いづくよりとも知らざりし。

地 「鶴ひとつ飛び來り。陳氏が眉に羽を休め。飛びめ
ぐり飛びさがり。舞ふよと見しが不思議やな。有
りし鏡の割となり。もとの如くになりにけり。満
月の山を出で。碧天を照らす如くなり。是や賢女
の。名を磨く鏡なるべし。

シテ 「如何に罪人何とて遅きぞ。

詞 「片時の暇といひつるに。冥官怒りをなし給へば。

俱生神急ぎ苦患を見せよとの仰せを蒙り。瞋恚の

燃えたつ熱鉄のしもとを振り上げて。

地「空蟬の。く。骸は娑婆にや留まるらん。魂は冥途にもぬけの衣の。玻璃の鏡の潔き。面前に引つさげ引き向け。あれ見よ娑婆にての罪科よ。

シテ「こは如何に不思議やな。

地「こは如何に不思議やな。孝子の弔ふ功力によつて。鏡の影をよくく見れば。頭に玉座膚は金色。両臂をかゞみて手を合はすれば。さながら菩薩の座

像かと。御空に花降り虚空に音楽。聞かず見もせぬ冥途の奇特。すはや地獄に帰るぞとて。大地をかつばと踏み鳴らし。大地をかつばと踏み破つて。奈落の底にぞ入りにける。